

[研究ノート]

人道主義者としての Pearl S. Buck の側面

佐藤重夫

Pearl Buck は文芸評論家 Theodore F. Harris⁽¹⁾ に対し、自分は決して人道主義者ではない、とはっきり述べているが、この人道主義という言葉は、あらゆる点で Pearl Buck に相応しい呼称と言えるのではないだろうか。しかし、そう呼ばれることに、ある意味で彼女は、却って自己作品の評価に悪影響が出るのではないか、つまり、作家としての本来の地位が二次的なものになるのではないか、という懸念を持ち、人道主義者としてのレッテルを貼られるのを極度に嫌っていた。彼女にとって、著作が天職であるからである。「本を書くこと」が自分の使命であることを彼女自身強調している。⁽²⁾

しかし、少なくとも 1930 年代から「作家と人道主義者」という、併用した呼び方が Pearl Buck の経歴に極めて密接な関係があるので、それを分離しては考えられない。人道主義的関心事は彼女の文学的関心事でもあるからである。

Pearl Buck の人道主義に対して基本的中心をなすものは、生涯、人種的偏見に反対する激しい闘争であった。この感覚が Pearl Buck の幼少期から芽生えてきたのだが、特にこの傾向を強く印象づけたのは、1900 年の義和団による北清事変⁽³⁾と 1926 年から翌 1927 年にかけての中国国民革命軍による北伐蜂起⁽⁴⁾、この二つの歴史的事実のあった時期である。

宣教師である Pearl Buck の両親は、できる限り一般の中国人民の生活の中で暮そうと努めた。つまり、伝道団地区での生活を避け、中国の生活の中で娘に慈善と寛容の精神を強く育成しようとしたのである。Pearl Buck が 8 歳のとき、中国の友達に彼女に敵意を示し始めるようになった。同時に、彼女に対して奇妙な行動をとるようになっていったのである。これについて、母親は Pearl Buck に対して、ヨーロッパの国々から来た人々は、中国人を虐待したり、殺害したりしているので、白人に対する反感がひどく強くなっているのだ、と説明している。白人のすべてが必ずしも中国人を傷つけているわけではなかったが、白人という理由ですべて同類と見做されていたことを、少女であった Pearl Buck もよく理解していた。この時期まで、彼女は憎しみというものを知らなかったし、自分や両親、その他の白人達が、帝国主義者や搾取者の白人達と同類と見做されることに承服できなかったのである。Pearl Buck や両親に好意を持っていた中国人でさえも、昔から恨みをむき出しにしているような中国人の

仲間から激しい非難を浴びることを恐れて、冷淡で無関心な態度を装っていなければならなかった。彼女も両親もなんら罪を犯しているわけではないが、肌の色や人種という理由でひどく嫌われていたのである。

幼い Pearl Buck は、このときはじめて恐怖と危険というものを知った。当時、中国に君臨していた西太后(1835~1908)が白人の国外追放を決意したという噂が立ち、たちまち世界中に拡がっていったのである。専制君主であるこの西太后について、Pearl Buck は後年、小説に書いている。西太后は、略奪や盗みをつ働き、特別の居留地や待遇を要求したり、殺人さえ犯す白人達に愛想をつかし、どうすることもできず、結局思い切った手段を取らざるを得なくなったのである。Pearl Buck の父は、西太后の、こうした心情にいささか共鳴していた。つまり、白人は暴力で中国の一部を強奪し、道徳的、法律的義務をよそに、たびたび粗暴な振舞いをしてきたことを是認していたのである。

Pearl Buck の父、Absalom Sydenstricker は西太后の怒りをよく理解してはいたが、その怒りが果してどこまでが真実なのか疑問に思っていた。山東省における宣教師や幼児虐殺のニュースは、実に身の毛もよだつ恐ろしいものであった。危険はそれほど緊迫したものではなかったが、しかしついに、その危険が訪れたのである。北清事変である。そのため、Pearl Buck の母親 Caroline Sydenstricker やその子供達は上海へ脱出せざるを得なかった。両親はいずれも在住の土地を離れるのを望まなかったが、白人の子供達が殺害されたというニュースを耳にした以上、そうせざるを得なかったのであろう。ほんのわずかの所持品を携行することはできたが、家庭用の銀製食器類は庭に埋めていかなければならなかった。アメリカ領事館に掲揚されている国旗も、すでに脱出したことを知らせる、赤一色の旗に変えられていた。避難する家族を無事上海に送り届けた父 Absalom Sydenstricker は、自分の職責を守るため、勇敢にも元の布教地区へ舞い戻ってきたのである。

Pearl Buck には上海における避難中の記憶が定かではない。しかし、忘れることのできないエピソードが一つある。それは、母と彼女がひどく混雑していた道路を歩いていると、その前に歩いていた一人の中国人の歩き方が余りに遅く、その歩調に苛立たしさを覚えたことがある。その中国人紳士は弁髪の上に

飾りをつけていた。Pearl Buckはこの飾りを軽く引っぱった。すると、その紳士は振り向いて彼女を激しく怒ったのである。母親はすぐにわが子の非を詫び、あとで、このような行為を繰り返すと危険なことになる、と彼女に注意した。このときはじめて、母親に恐怖が感じられている姿を見たのである。母親が中国人におびえているのに気づくと、Pearl Buckは重大な変化が起きていることを悟った。北清事変後、彼女は白人として生きる世界、そして中国の住民の一人として生きる世界に、多くの面で融合しているもの、あるいは分離しているものが介在していることに気づくのである。結局、中国に住む初期の白人達の振舞いが、このような危険な状況へと導く結果となっていくたのである。

1900年の北清事変の最中に、中国の住み慣れたわが家から強制的に立ち退きを命じられたことが、Pearl Buckの心の中に深く刻み込まれ、ぬぐい去ることのできない思い出となっている。それに、もう一つの顕著な印象としては、恐怖と危険という、はじめての自覚である。1926年から1927年にかけて、新しい革命運動が中国に起きた。それは国民党と共産党の協力による国民革命軍の北伐蜂起だが、その根底には独得な排外思想が潜んでいた。Pearl Buckの父はこの事実を認めようとはしなかったが、彼女は、27年前に上海へ避難する際、中国人の弁髪飾りを引っ張ったとき、その男の顔に憎悪の念が燃え盛っていたのを思い出していた。また、ヨーロッパ各国の帝国主義者達が、長年中国人をさまざまな形で挑発していたことも記憶していた。彼等は革命家達の敵意に直面していたので、南京を至急退去するよう、アメリカ領事から警告されていたが、Pearl Buck一家は決して立ち退こうとはしなかった。

1927年3月のはじめに、中国国民革命軍の兵士が南京を攻撃し、3月27日の朝に南京を征服した革命軍が、白人を殺害したというニュースが伝えられた。当時、南京キリスト教大学の副学長であったWilliam博士は、最初に殺害された白人達の一人であった。Pearl Buckはじめ、自分の夫、二人の子供、父、妹、姉の夫と子供など、家族一人ひとりがそれぞれ、白人殺害のニュースを耳にし、隠れ家を探し求めていったのである。その際、遠方にはざわめきが聞こえ、それが死の響きとなって、次第に近づいてくるのが感じられた。そのとき、Mrs. Luという中国の女性が友人であるPearl Buck一家に隠れ家を提供しようと、裏口

から入ってきたのである。彼女は一行を自分の家の、手狭な部屋へ案内してくれた。この部屋は泥で作られ、家並のひどく立て込んだところであって、窓一つなく、ただ屋根にぼっかり穴が1つあいているだけのものであった。その穴から、建物の燃えている炎が空一面に反射して見えたが、その燃えている建物が自分の教えている神学校であることを、Pearl Buck の父は明らかにしている。Pearl Buck は、自分と家族がこれまで中国人を援助し、親切にしてきたけれども、他の多くの白人達の不正行為がたたり、結局、その影響が自分の家族や親類にも波及してきたことを悟った。自分や家族が、ただ肌の色が違うという理由で、憎しみや死から逃れるための術を考えざるを得なくなったのである。大勢の避難者は混雑した隠れ家に留まって、わが家が暴徒に侵入され、略奪されている様子を耳にすることができた。時の経過は遅々としていた。Mrs. Lu の近所の中国人達は皆、Pearl Buck の家族が人目をさけて生活していることを知りながら、このことだけは口外すまいと思っていた。中国人の友達の中には、アメリカ人である Pearl Buck 一家を取り持ってあげようと、革命軍の最高司令官の所へ助命嘆願に行ってくれるものもいた。その使者はその日の午後遅く戻ってきたが、革命軍司令官への助命嘆願は拒否されたことを伝えてきた。死の可能性が一刻一刻と近づいてきたのである。遠くの方からは、大砲の轟音が聞えてくる。はじめ、大砲が使用されているということを白人は誰も信じなかった。中国人は武器らしいものを持っていなかったからである。その轟音が河川をのぼってきたアメリカやイギリスの軍艦から砲撃されているということ、避難者が知ったのはそれから暫くしてからである。その後、中国の、ある友人が指揮する革命軍の兵士達が隠れ家に現われ、避難者達を、ある大学の建物へ護送していった。そこには、大勢の白人が群がり、監視されていた。これらの人々は皆、何等かの形で中国人の友人に救助されたものばかりである。米英両国の艦長は白人救出の準備を始め、避難者達は上海へ向う砲艦に乗せられたのである。この激しい戦闘の中で、わが身を顧みず、いろいろ苦勞しながら白人を救出してくれた多くの中国人を思い出し、Pearl Buck はこのことを心から感謝している。これが、彼女が思い浮べられるエピソードの中で、最も印象深い思い出の一つであったのである。物質的な所有物は失ったが、人間に対する彼

女の感性が豊かになったのは事実である。人間関係の大切さが、彼女の心にますます強い印象を与えてくれたのである。

特に、家庭教育と、北清事変や1926年から1927年にかけての革命蜂起の際に受けた経験などにより、Pearl Buckは慈愛の精神が如何に大切であるかを、常に強調するようになった。東洋思想も西欧思想も持ち合わせている彼女であれば、両方の視点に敏感なのは当然である。もし、多くの中国人が極端な、敵意ある態度を示していれば、それは単に過去の数々の白人達の不正行為に対する反抗に過ぎないことを、彼女自身よく理解していた。思慮深く、魅力的で、しかも、心温まる人間愛の記録であるPearl Buckの自伝的作品、My Several Worldsの中で、もし自分がさまざまな戦争、租界、強奪、不平等条約などの条件のもとで教育された一中国人の娘であったとしたら、恐らく白人の国外追放に協力したであろう、と率直に認めている⁽⁵⁾。と同時に、かなり多くの中国人は白人による過去の悪事を知りながら、敵意よりも慈善や親切心をより重んじていた、とも述べている。Pearl Buckが、世界の人々に対し、また作品の中において人間愛的な接し方をするというのは、このような経験と思想がその基盤となっているのである。

Pearl Buckは、いついかなる場所においても人種的偏見が認められるような行為があれば、それを厳しく非難したりした。しかも、単に非難するばかりでなく、態度、相違点、問題点などについての相互理解を押し進めるため、自作の小説やノンフィクションの中で、アジア人をアメリカ人に、また、アメリカ人をアジア人に説明することを怠らなかつた。例えば、Corlos Romuloとの対談集Friend to Friendの中で、彼女は極東における植民地主義の憎悪について触れ、アメリカがあらゆる機会に植民地主義を非難しなかつたことを、アジア各国はひどく失望した、と説明している⁽⁶⁾。

現在、アメリカ人がアジアの評判があまり芳しくない理由を解説する、かなり多くの本や雑誌が出版されているが、この話題に関しては、それ以前すでにPearl Buckの多くの著書の中で明確に触れているのである。彼女の作品に接した人であれば、誰もがアメリカに対するアジア人の態度をよく理解できるはずであるし、「多額な援助資金を提供しているのに、何故嫌われるのか」式の疑問

も氷解するはずである。Pearl Buck の人間愛的理解の副産物とも言える、このような啓蒙自体が、世界の人々の眼に、アメリカ人の姿がどのように映っているかを理解させる貴重な資料となっているのである。彼女の作品には、多くのアメリカ人が必要とする洞察力の要素が充満していると言っても過言ではあるまい。

更に、一面的な見方をしないというのが、Pearl Buck の賞賛に値する点でもある。白人が犯してきた過去や現在の悪事だけが、誤解を招くものだとは見ていない。アジア人の中には、消極的で、移り気な、そして苛立ちがちな人々が多いことも認識している。例えば、Pearl Buck の作品の中で、植民地政策によって支配されてきたアジア各国は、今日もなお、かつての不幸の責任を当時の支配者に負わせたり、自分たちの運命を切り開き、その統率力を育成する責任さえ回避しようとしている傾向がある、と記録している。

それにも拘らず、Pearl Buck は、自由な探究心と知識欲があれば、アメリカとアジアは相互の立場を理解し、関係を改善し、更に、食糧、医療、教育、平和、自由など、いわば人類の必需品を世界の人々に進んで分与することができるようになる、と信じていたのである。彼女の著書や講演、講義の多くは、この目的のために向けられてきた。作品を読めば、いたるところに人道主義が込められていることがわかる。

作品の中で、国際協力という重要な問題や戦争と平和という大きな問題に触れているときでも、個人とか比較的的地方色の濃い事柄に向ける彼女の関心がうすれるということは決してなかった。これを証拠だて、Pearl Buck の公共意識を明示し、しかも彼女の努力が成功に導いたことなどを立証する事例はいくつかある。

アメリカ政府が1954年にニューヨーク港内にあるエリス島の移民センターを閉鎖したあと、新しく送られてきたアメリカ移民はマンハッタンの Federal House of Detention やニューヨークの Westchester County Jail に収容された。彼等は犯罪を犯してもいないのに、その履歴の検証が済むまでの間刑務所に収容されていた。収容期間が数週間に及ぶこともあった。このようにして、施設に入れられた移民達は、犯罪者と生活を共にし、自由な活動やレクリエーショ

ンも制限され、その他の生活の楽しみも殆どできない状態にあった。「自由の女神」に刻み込まれた言葉を愚弄するようなこの扱いは、被收容者の欲求不満や失望を惹き起し、施設を訪れた友人や親戚の激怒を買う結果となった。Pearl Buck の人道主義的な関心事を知った、これらの人達の多くは、次第に彼女に接触するようになっていった。

1954年11月16日のNew York Times紙に掲載されたPearl Buckの手記によれば、彼女はこのときの移民局の行為を非難し、刑務所の中で強迫されている移民の実例をいくつか紹介している。同紙は直ちにこの原因をさぐり、その不法行為や虐待について社説に採り上げている。それから1か月も経たない1954年12月10日に、移民局はこの行為を中止し、拘留されている在留外国人は連邦刑務所から釈放された。翌日、同紙は政府のとったこの措置を賞賛する社説をのせ、最初にこの問題に注意を喚起したPearl Buckに対して感謝の意を表明している。こういう事例は、Pearl Buckが一般大衆の意識を揺り動かした、多くの実例のほんの一部に過ぎない。これは、しばしば著書の中で繰り返している彼女の思想の重要な局面を示している。アメリカ大衆の関心を最も引いたPearl Buckの人道主義的事業は、戦争孤児のための救援活動であった。1949年に、夫のRichard Walshと共にアメリカ人とアジア人との混血児のための養子縁組機関であるWelcome Houseを設立した。Welcome Houseは、先ず混血児を養子として迎え入れられる家族を探す問題から業務を始めたのである。このような孤児達に開放する家庭は極めて少なく、これらの少年少女達を扱う余裕のある施設があったとしても、単に孤児という理由だけで彼らを受け入れようとはしなかった。先ずPearl Buck夫妻は率先して、アメリカ人と中国人との混血児を1人、アメリカ人とインド人との混血児を1人、それぞれ養子として迎え、ペンシルベニア州Buck Countyの自宅で養育することになった。その後、この事業に関心を持ち始めた近所の人々は、進んでこの計画に参加するようになり、そこで大勢の子供達を養育できる施設が近くに設立されたのである。もともと、このWelcome Houseというのは、アメリカで生れた混血児だけを対象として收容する施設として建てられたものであるが、時が経つにつれ、Welcome Houseは養子縁組を世話する機関として発展し、海外からの孤児達の養子縁組

にも尽力するようになった。日本、復帰前の沖縄、そして韓国などの何百という孤児達のために、アメリカの軍人達が養父となったのである。なかには、里親となった両親が途中で養育の責任を否認したものもいる。これらの孤児達はアメリカ人との混血児ということで、生れ祖国でしばしば差別され、その結果は村八分ということになる。しかも、生活が不安定な状態なため、早晚、政治的動揺や反乱の起り得る原因にもなりかねなかった。Pearl Buck が指摘しているように、アメリカ人はこの問題について全く顧みようとはしなかった。多くの孤児達が、戦後、養子縁組としてアメリカに受け入れられる余裕はあったけれども、当時のアメリカの法律では、孤児達を救済するという大規模な計画の実施に踏み切ることができなかつた。⁽¹⁰⁾ 混血児に関する問題が少しでも存続する限り、Welcome House では、無数の孤児や、誤って生れた子供達を養育したり、孤児院に収容したりした。そして、アジア、アメリカ両国の文化遺産を受け継ぐ、誇りをもったアメリカ人として成長させることに専念してきたのである。

1964年には、The Pearl S. Buck Foundation が設立された。この財団は、アメリカ人を父親とし、海外に残さざるを得なかつた混血児の養育に奉仕する非営利機関である。

この財団の目的とするところは、――

- (1) アメリカ人に、アメリカ・アジア混血児の存在と必要とするもの、そして混血児に対する責任を知らしめるよう指導すること。
- (2) 混血児が成人期に達したとき、両国の祖先の誇りとなり得る、責任感の強い、創造力のある人間になれるよう教育すること。
- (3) これら混血児が出生国において、社会的に受け入れられるような環境条件を整備すること。⁽¹¹⁾

などとなっている。

同財団では、医療、衣服、カウンセリング、教育の機会なども提供している。アメリカ・アジア混血児はアメリカ政府の公式の計画によって支えられているものでもなければ、援助を受けているものでもない。従って、The Pearl S. Buck Foundation は、この子供達や、その生みの親であるアジア人の母親を独占的に援助している唯一の機関なのである。財団では主として一般の市民の慈善寄付

により事業を続けているわけであるが、その外に Pearl Buck の数々の著作の印税もすべてこれに投入している。

財団本部は現在、ペンシルベニア州、Buck County にある Pearl Buck の所有地跡、Green Hills Farm に置かれており、本部の指揮下の混血児救援センターのあるアジア諸国、つまり韓国、タイ、台湾、フィリピンなどには、2カ国語に通じるソーシャルワーカーが雇用されている⁽¹²⁾。

Pearl Buck はまた、死ぬまで知恵遅れの子供達の救援活動という重要な役目も引き受けていた。彼女自身の娘、Carol も遅進児であるのは周知の事実である。こうした状況や、これに関連する事柄については、すべて彼女の作品、The Child Who Never Grew(1950)の中で詳しく述べられている。長い期間にわたり、彼女はこの問題について多くのものを書き残している。ニュージャージー州の Vineland にある「障害児訓練所」でも、極めて活動的な役割を果たしている。この訓練所はアメリカでも有名で、遅進児の養育や、そのトレーナー育成のため、1888年に創設されたものである。この施設では現在、知恵遅れの原因や治療法についての貴重な研究が行われている。

Pearl Buck の人道主義的实践例を更にいくつか挙げてみると、彼女の関心事が広い範囲にわたっており、しかも、その視点が良識を備えたものであることがうかがわれる。1941年には The East and West Association を設立している。これは、著書、講演、映画、ラジオ番組などの交流を通じ、より一層の調和と世界の理解をもたらすことを目的とする非営利機関である。第二次世界大戦以前から戦中にかけて、Pearl Buck は中国に多量の食糧や医薬品などの救援物資を送る、ある団体の一員でもあった。また、さまざまな自由独立運動にも参加している。インドがイギリスから独立するずっと以前から、彼女はその独立運動の忠実な支持者であり、ガンジーの人道主義的理想促進のため結成された Mahatma Gandhi Memorial Foundation の設立者の一人でもあったのである。

一人の女性がこのように幅広い関心を持ち、これらさまざまな活動にこれほど重要な役目を果たし、同時に百冊以上の作品を出版するという作家活動を続けていくことは、実に驚くべきエネルギーの持ち主と言わざるを得ない。

最後に、人道主義と Pearl Buck の作品の背景をなす関係について、少し触れ

ておきたいと思う。

The Patriot(1939)という作品を完成してから、Pearl Buckの文学活動は上り坂となり、その後の業績に期待がかけられたが、実はその頃、つまりノーベル文学賞を受賞した頃から、人道主義的な奉仕活動に心が奪われるようになっていったのである。このような関心が彼女の小説の中にまで入り込むようになり、創作の客観性が急速に失われていった。Dragon Seed(1942)やThe Promise(1943)のような小説が、中国の対日闘争の宣伝的効果をもたらすほどの、教訓性の強い考えを打ち出すようになった。かつて、James Joyce(1882～1941)が芸術家の客観性について述べた有名な言葉に、

The artist …… remains within or behind or beyond or above his handiwork, invisible, refined, out of existence, indifferent, paring his fingernails.

というのがある。これこそThe Good Earthのために述べられたような言葉ではあるが、この金言も、もはやPearl Buckには適用できないものとなっていた。

Pearl Buckは1939年以後、作品の筋立てやダイアローグの扱い、それに技巧面など、以前よりは軽快なものになってきてはいるが、それに続く創作上の重要な技巧的進歩はほとんどみられなくなった。技法の実験すら行われていなかったし、登場人物の分析に深く立ち入ろうとする努力もなく、調子や雰囲気の微妙なところを追求しようとする意気込みも感じられない。更に、作り話、象徴主義、あるいはその他の現代小説特有の要素を活用するという関心も示されていない。こうした事実から考えてみても、Pearl Buckはごく最近の文芸批評家からうとんじられる原因となっているのかも知れない。それは、作り話とか文学の原型、意識の流れ、そして象徴主義といった文学上の関心事に全く触れようとしないうえ、批評家たちは彼女の作品を分析論評することができないのである。

Pearl Buckが現代技法に歩調を合わせることを拒否した理由は、おおかた察しがつく。出来事や登場人物の性格描写を強調する古風な中国的物語の慣習に従ったのである。とは言いながら、ここにも「二項対立」の概念がみられるの

である。1930年代の彼女の最も油の乗り切った作品には客観性があり、教訓的な要素が差しひかえられている。この技法によって書かれた作品には、迫力が感じられ、意味深長をも込められている。しかし、1939年以後は客観性がくずれ、教訓主義的傾向が特に目立ち始め、結局、作品の質的低下をもたらしていった。もしノーベル賞受賞後の作品にも、相変らず中国小説的文体の模倣を続けていたとするならば、彼女の比較的初期の作品などにみられる重厚感を維持していたかも知れない。人道主義への関心が高まるにつれて、真実性を失い、Thomas Hardy(1840~1928)が教訓的要素を力説する目的で提唱した「自然の真理」をゆがめてしまう愚かしさをさらけ出す結果となった。更に進行を続ける感傷主義が、彼女の後年の作品にますます感じられるようになった。この傾向は最も高度な芸術的効果を狙うには不向きである。1967年に出版された *The Time Is Noon* ——この作品は1930年代以後出版されたものの中でも、最もリアリスティックな典型的な小説と思われる——は、実は1936年から1939年の間に書かれたものであり、これは注目すべき点でもある⁽¹³⁾。

Pearl Buckの後年の作品は、初期のものとは性格がだいぶ変化しているが、重要な素材や人道主義的テーマを取り上げることに関心を持っているために、単なる普通のベスト・セラーのように短命的な作品の危機から救われている原因であることも容認できる。Other Gods, Command the Morning, The New Year, その他同じ傾向の小説などで、Pearl Buckは極めて重要な基本問題に触れ、それを取り上げることで、読者の期待に十分報いていると言えるであろう。The Hidden Flowerという作品では、国際結婚の難しさを考察の対象としたものだが、そればかりでなく、アメリカの、ある州の雑婚禁止法の問題や、その効果についても考察に及んでいる。確かに、白人と黒人間ばかりでなく、白人と混血の他人種との結婚を禁止する法律も施行している州がアメリカではかなり多い。例えば、黄色人種やインド人にまで触れている州もある。このような法律の不合理性、不公正さは明白なことであるが、そうした法規が厳然と存在していたことも事実であり、アメリカ50州のうちで、過半数が施行していたのである。Pearl Buckは、時機を得たものではあろうが、悲惨な、このような問題についても、しばしばノーベル文学賞受賞以後の作品の中で直接取り組み、解決

の光明を投げたりしたのである。従って、Pearl Buck の創作の大部分を読んでみれば、よく出来た、面白い物語よりも何か重要なものが含まれていることが感じられてくる。彼女の本は、人類が直面してきた、あるいはこれからも直面し続ける最もやり甲斐のある、人類の基本的な問題に思慮深い、挑発的と思える洞察力を提供してくれる。Pearl Buck は一般に批評家たちから軽視されているとはいえ、以上のような特性こそ彼女の後年の作品に価値観を与えているということができよう。

この点に関して述べている Elizabeth Janeway の所見は言及に値するものである。それは、知性ある多くの読者が、なぜ Pearl Buck の作品に異常な関心を示すのかを指摘しているからである。

Her readership is secure. She has something to say and says it with lucid ease. If she lacks the warmth of humor she makes up for it by the warmth of sympathy. If she has a mission she can also tell a story. She writes consistently and successfully to be read ;.....it is too bad that Miss Buck's audience is, par excellence, the audience which is ignored by contemporary critics of writing. This audience is the American middle - class woman who reads novels. Thirty years ago H. L. Mencken may have been right in seeing her as an idiot who took her attention from her house, her children, and her servants only to gossip about her neighbors. She is not an idiot today.

If our mores are changing in the direction of tolerance, if our knowledge of the world is broadening, it is she who is accepting the change. It is vital to communicate with this woman, for if literature has first of all the duty of reflecting life truly (I don't mean photographically), it has the second duty of presenting this reflection to as large an audience as possible. For twenty years Miss Buck has done this. It is an excellent thing that she continues to do it so well.
(14)

Janeway 女史の所見は Pearl Buck の創作について言及しているが、ノンフィ

クシヨンの分野においても全く同じ事が言える。遅進児や養子縁組などに関する作品の中で、Pearl Buck は想像以上にアメリカ女性に強い影響力を及ぼしているのである。彼女自ら Peal S. Buck Foundation, Welcome House, The East and West Association などの事業に参画し、更に理論構築と人道主義の遂行によって、自己作品をいっそう効果的なものにしたのである。

Pearl Buck の人道主義についての知識がなく、また思索や創作の中で、人道主義が果たす重要な役割を理解できなければ、到底彼女の輝かしい文学活動を理解することは不可能であろう。世界中の一人ひとりの人間の大切さに対する基本的な感情や、人間はすべて基本的に和合するという包括的な実感が、彼女の思想や作品の中に充満している。この2点を考え合わせると、彼女には Leaves of Grass(1885)の詩人 Walt Whitman(1819~1892)を思い起させるものがある。同時に、そこには自由と平等、一般人に対する確固とした信頼、そして進歩向上を常に信じるという、抗し難い執念が燃え盛っているのである。人道主義的な実践活動を踏み、著書や雑誌を通じて、Pearl Buck は何百万という大勢のアメリカ人と接してきた。それは特に1930年代から1960年代にかけてである。彼女が人権を絶えず強調し、人種的偏見を公然と非難し、女性にはその知性を活用して専門的職業への関心を持たせるよう激励したりしてきたが、こうした意図が昨今の社会にも立派に通用する概念となっている。Pearl Buck がこれらの概念育成に相当の影響を与えていることは、先ず疑いのないところである。

〔注〕

- (1) Theodore F. Harris は、“Pearl S. Buck・A Biography”, I およびIIの評伝2巻を1969年と1971年に出版している。最初の1巻は伝説、2巻目には Pearl Buck の思想を伝える解説、随筆、手紙などが集録されている。
- (2) Theodore F. Harris, “Pearl S. Buck・A Biography”(New York : Day, 1969), I, 190.
- (3) 排外的農民闘争, 義和団の乱・団匪事件ともいう。
- (4) 中国の軍閥打倒のための軍事行動。
- (5) Pearl Buck, “My Several Worlds”(New York : Day, 1954), p. 208.
- (6) Pearl Buck and Carlos Romulo, “Friend to Friend”(New York : Day, 1958), p. 83.

- (7) New York Times, Nov. 16, 1954, p. 28.
- (8) New York Times, Nov. 18, 1954, p. 32.
- (9) New York Times, Dec. 11, 1954, p. 12.
- (10) New York Times, June 9, 1957, Sect. 4, p. 10.
- (11) "The New children—The Amerasians" (Perkasie, Pa. : Pearl S. Buck Foundation, n. d.) : a pamphlet published by the Pearl S. Buck Foundation from their Green Hills Farm, Bucks County, headquarters.
- (12) "Green Hills Farm : An Historic Site"(Perkasie, Pa. : Pearl S. Buck Foundation, Inc., n. d.), a pamphlet from the Foundation's Bucks County headquarters.
- (13) Theodore F. Harris, I, 270.
- (14) Elizabeth Janeway, "The Optimistic World of Miss Buck," New York Times, May 25, 1952, Sect. 7, p. 4.